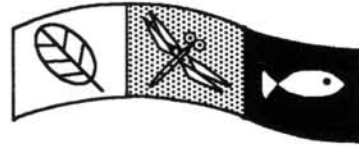


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 12



ギンリョウソウ (豊田市秋葉町) (1998年 4月22日洲崎燈子氏 撮影)

猿投山の里山づくり



日比谷 利雄

猿投山は愛知高原国定公園に指定された区域の一部で、東海自然歩道が通っています。豊田市にとっても非常に大切な自然をもつ山ですし、とりわけ私たち山麓の猿投町に住んでいる者にとって、一つの誇りでもある名山なのです。

この山には1年を通じて沢山の人ハイキングなどに訪れます。山を愛する人が増えるのは、私たちは大歓迎でした。それでも、次第に捨てられるゴミの問題が、放って置けないくらい深刻になってきました。平成6年、地元の住民たちで猿投山の環境を守らなければ…と、有志が集まって猿投山愛護会をつくりました。第二の人生を、「愛する猿投山を美しくし、多くの人達に楽しんでもらうために尽くそう」と思った年輩の会員の情熱は、登山者にも伝わったのでしょうか。運動を始め

て2年ほどで、ゴミ問題から解放されるくらいきれいになりました。

こうした環境美化活動の高まりの中で目覚めたことがあります。それは「昔よく見られた生き物を、自分たちの手で蘇らせよう」という思いです。猿投山愛護会の中の何人かが、懐かしい生き物の棲める「里山づくり」を始めました。地主さん達のご厚意もあって、里山づくりの場所が決まりました。猿投神社の鳥居のある場所から西へ1km足らずの、猿投町入道地区の休耕田と、それを囲む低い山です。

どんな生き物を蘇らせるのかですが、この活動にふさわしい里山の動植物でなければなりません。まず最初に思い浮かんだのが、春の女神ギブチョウです。調べてみますと、里山の予定地にも、

幼虫の食草のスズカカンアオイがあることがわかりました。そして現在のように山林が放置されないで、伐採されていた30～40年前頃にはギフチョウもよく見られたということでした。最近の猿投山では、一頃に比べ数は少なくなったけれど、広く生息しているそうです。棲みやすい環境さえつくれば、周辺からこの場所へ移ってきて棲みつくという期待が高まりました。

里山の動植物はギフチョウだけではありません。予定地の長を最大限に生かして、昔みられた生き物をできるだけ多く復活させたいのです。従来から生息、自生していたものは増殖させる。滅んだものはこの猿投山に近い地域のものを、その地の自然を壊さないように注意深く配慮しながら移していく。そのような計画を立てました。具体的には、動物ではハッチョウトンボ、ホタル類（ヘイケボタルはいまでも生息していますがゲンジボ



タルはどうか?)、タモロコ、メダカ、フナ、ドジョウなど、植物ではノハナショウブ、ハンゲショウ、ヘラオモダカ、オミナエシ、キキョウなど多くあります。

これだけのことを実施しようとするれば、人手が相当かかります。また費用も馬鹿になりません。私たちの考え方を大変良く理解し、見守ってくださる企業家がおられました。東和電気(株)、(株)イーシーエース社長の鈴木衛さんです。鈴木さんはご自身も、猿投山をこよなく愛しておられました。環境を良くしたいとの気持ちを常に持ち続けてこられた方です。その気持ちを豊田市のほうに伝え、寄付を申し出ておられました。そのお申し出を、私たちの里山づくりの費用にと調整されたのが、市商業観光課でした。この経済的ご支援は毎年続き、平成11年で4回目になります。本当に有り難いことでした。これで里山づくりの運動は軌



道に乗ったのです。人手のほうは、私たちの運動を知り、協力を申し出てこられたボランティアの方が、平成10年5月現在17名あり、勇気づけられました。地元会員を含めて、現在30名余りで里山づくりの活動が展開されています。

このようにして、市民、企業、行政の三者が互いの役割を分担する形での実行組織が出来上がったのです。いよいよ仕上げの段階がきました。数十年にわたって人との関わりのなかった自然です。一言で仕上げといっても、人の手が適度に関わったあの懐かしい里山に戻すのに、気は急ぎますが、一挙にやってみたって、決して思い通りにはいかないでしょう。相当な年月がかかります。自分たちの世代で日の目を見ることはないかも知れません。そうならば、この活動の伝統を後世にまで伝えていかねばなりません。三者共同の実行組織は、将来を見越した活動を支える力になると思います。

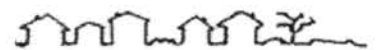
さてギフチョウは今年この里山に飛ぶでしょうか。そういう期待を年々膨ませながら、多分私たちの里山づくりはこれからも続くのです。矢作川流域の皆様のバックアップは、何よりの励みになります。よろしくお願い致します。

(ひびや としお、猿投山愛護会 会長)





里程標と距離標



新見 幾男

私の家の前に、名古屋と信州を結ぶ、昔の飯田街道がある。今の国道153号の旧道の一つだったのだろう。

今は脇道になってしまったが、かつては名古屋・伊保・四郷・枝下・足助を結ぶ主要街道だったという。

私の家は、四郷と枝下のほぼ中間点にある。雑木林の中の畑に30年程前に建てたのだが、もう周囲の林はない。旧飯田街道の向こう隣りの林には、市の運動公園ができた。リスもキツネもいなくなった。

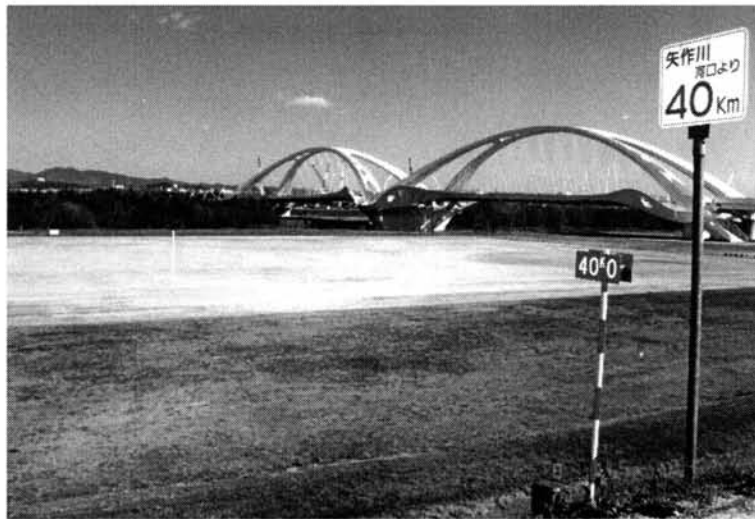
周囲の風景がまるで変わってしまったので、記憶がいまいだが、旧街道沿いに「名古屋へ七里」という石の標識が立っていたと思う。探してみたが、それはなかった。左は伊勢路という標識が残っていた。

「名古屋へ七里」は、旧街道のほかの場所で見たものかもしれない。私たちは「里」も「km」も器用に使いこなすことできる世代だが、「名古屋へ」は、「七里」の方が道のりを実感できる。「28km」では、頭で換算してみないと、距離感を伴わない。「夏アマゴ一匹」で育った世代だなと思う。

この石の距離標識は「里程標」というのだそうだ。里を程（はか）る標識という意味だろうが、一般にはそうは呼ばれず、単に道しるべとも言われてきたように思う。英語圏では「マイル・ストーン」と呼ぶのだそうだ。

「里程」は「陸地の道のり」のことだと辞書に書いてあるが、最近では川の堤防にも里程標が無数に立っている。海と川の境界の河口点から上流方向への距離を、km単位で表示してある。

たとえば、豊田大橋付近には「40.0km」の標識が立っている。大橋から40km、つまり10里下れば海に出る、ということがわかる。矢作川の延長は117kmと言われるから、大橋から77km、つまり20里近くのばれば、源流点の大川入山に達するわけだ。堤防の里程標から、上流の森を、下流の海を思うことができる。里程標は人の気持の中に、森・川・海の一体感情を育てる。



小さい方が豊田大橋付近「40.0km」の距離標。要所には右側の様な大きな物も立っている。

建設省の出張所に「矢作川の里程標は何kmおきに立っていますか」と聞いたことがある。最初は私の質問の意味が分からなかったようだが、「今は里程標といわず、距離標といいます」「青地に白字の標識が200mおきに立っていて、そのうち1kmおきの標識は赤地に白字です」

と教えてくれた。

その後堤防を走ってみると、なるほど、豊田市水源町の明治用水頭首工付近の「34.6km」標識は青地に白字である。豊田大橋の「40.0km」は赤地に白字だった。子供の背丈ほどの鉄柱に、小型の鋼板の標識が付いている。

昔の人は里程標を頼りに旅したことだろうが、私たちは「天然アユの群れが12.6km地点（矢作川と矢作古川の分派点）を通過した」というふうに、堤防の距離標を使っている。

残念ながら、矢作川の距離標は建設省直轄管理の42km地点（矢作川・籠川合流点）までしか立っていない。それより上流の愛知県、岐阜県、長野県管理の区間には、距離標はない。各県が立てるのが本当だろうが、それが無理なら市町村で代行できないだろうか。河川愛護の思想を育てるためにも、自動車走行の実利にも、とても有益な標識だと思う。

もちろん距離標のない区間だが、矢作ダムコンクリート壁には、「河口から80km」と赤字で大書してある。

もう少し上流の岐阜県上矢作町小田子というところには、橋のもとに「河口から89km」という手書きの標識があった。そうして小田子の人々は遥かに海をしのんでいるのかもしれない。矢作ダムのなかった時代は、海からカワマス（アマゴの降海型）や天然アユが毎春のぼって来ていたに違いない。山国の人々にも海は近い大切な存在だったと思う。

（にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長）

